

友だちを大切に思う心

国立教育政策研究所総括研究官

滝 たき

充 みつる

今の子どもの特徴

「小さな子どもは残酷だ」と言われることがある。自分の行為や行動が相手にどのような影響を与えるのか、周りにどのような被害をもたらすのか等を推し量る精神的な能力が発達していないことや、他者や生き物、集団のきまり等を尊重すべきという知識が乏しいことが、彼らの行動を結果的に残酷なものへと導くことが少なくないからであろう。

ところが、小学校の高学年になっても、小さな子どもと大差のない行為や行動をする子どもが増えている。言うまでもないが、ここで話題にしているのは、何も特殊

な家庭環境下にあるとか、個人的な資質に問題があるとかいった、特別な子どものことではない。彼らも含めた、今の子どもに広く見られる傾向のことである。

もちろん、そうした高学年の子どもの場合、小さな子どもとは異なり、知識が欠けているわけではなからう。また、自分の行動の影響を推し量る精神的な能力についても、まったく発達していないわけではない。だが、そうした能力が発揮されるのはもっぱら自分の直接的な利益や目的のためであり、他者のためということはない。また、知識も単なる知識にとどまり、行為や行動に反映されることは少ない。その結果、高学年や中学生になっても、対人関係の問題が絶えない。

こうした子どもには、ただ乱暴なだけのタイプのほかに、人見知りの強いタイプも存在する。つまり、「人を人と思わない」タイプと「人とかかわるのが苦手」というタイプの二通りである。攻撃的な前者と内向的な後者とは、一見、正反対のような印象を受けるかもしれない。だが、背景にある要因は共通している。彼らは共に、「自分の味方をしてくれる親（あるいは保護者。以下同じ）」「あれこれうるさく言わない親」「自分の言いなりになってくれる親」に恵まれているのである。

そんな彼らにとって、同学年の友だちは一番厄介な他人と言ってよからう。なぜなら、大人の他人の場合なら、自分のことを傷つけてくる可能性は低いし、むしろ自分に気をつかってくれたり、譲ってくれたりする可能性すらある。だから、自分のしたいことが尊重され、思い通りに事が進んでいく。ところが、似たような性格の友だちの場合には、気づかい等は期待できず、それどころか自分に危害を加えてくる可能性すらある。「一緒に仲よくすると楽しい」などは、とても思えない。

その結果、「友だちには、自分の楽しみの邪魔はさせないし、自分に従ってもらおう」と考えれば、前者になる。そして、「友だちは、自分の言うことを聞いてくれ

ないし、イヤなことをしてくるから嫌い」と考えれば、後者になる。いずれにしても、彼らの関心は「自分の思い通りに事が進む」こと以外にはない。その実現のために前に出るか、後に引くかの違いがあるに過ぎないのである。

子どもの変化をもたらしたものは、なぜこのような子どもが増えてきたのだろうか。

では、なぜこのような子どもが増えてきたのだろうか。一部の子どもの問題ではないわけだから、児童虐待や発達障害等の個別的な要因による説明は無意味である。もっと大きな社会の変化を考えてみる必要がある。数十年前の子どもと比較して考えてみよう。

当時なら、いくら子どもに甘い親がいたとしても、自分のことしか考えない子どもは、きょうだいや祖父母、ときには親戚や地域の大人から叱責されることになった。あるいは、他の子どもと比較されて恥ずかしい思いもした。親にしたところで、世間を無視してまで甘やかし続けることは容易ではなかった。つまり、よほど病弱な子どもであるとか、よほど裕福な家庭とかいう特別な条件でもない限り、他者と折り合うことの必要性や方法に子どもが気づかされる機会があった。

また、そうした第三者からの外圧だけでなく、自ら進んで学ぶ機会も普通にあった。それは、近隣の遊び（仲間）集団の体験である。当時の子どもの多くは、一人で遊ぶ術をもっていなかった。そのため、遊び相手がいなければつまらない時間を過ごすしかなかった。彼らは、遊びの輪に加わりたい一心で、リーダーに従ったり、ルールを守ったりした。つまり、おもちゃも遊び相手もあてがわれるような特別な条件でもない限り、子どもは進んで他者とのかわり方を学ぶことになった。

ところが、周りから気づかされたり、自ら進んで学んだりという機会は、現在では姿を消しつつある。小家族化によるきょうだいの減少、核家族化による祖父母との同居の減少、都市部への人口集中に伴う親戚づきあいの減少、近隣のつきあいの減少や遊び集団の喪失等に加え、別居ゆえに孫に甘い祖父母の登場や、電気・電子機器がもたらした一人遊びできる環境の登場は、子どもたちにも他者と折り合うどころか、かわかることすら不要にしてみました。

さらに、近年の「癒し」「やさしさ」「受容」等のブームが、子どもを「叱らない」「叱れない」親を増やした点も見逃ごせまい。また、子どもに「自己実現」を安易

に求める風潮についても、子どもの他者軽視・自己重視の姿勢を後押ししているといえよう。

学校に何ができるのか

では、このような状況で育ってきた子どもに対して、学校は何ができるのか。学校教育は、どのような対応を求められているのか。攻撃的なタイプの子どもの叱責や指導は、多少なりとも効果があるろう。だが、内向的な子どもにはそんな訳にはいかない。結局のところ、根本的な解決に必要なのは、「友だちとかわかること」は、ときに嫌なことや面倒なこと、我慢しなければならぬことがあるけれども、やっぱり楽しい」と、子どもが自分から気づくことなのである。

なぜなら、周りにいる大人たちがよくない行為を禁止したり、よい行為を促したりすることで他律的に行動を規制しても、それはその場限りのものに終わるほうが多い。子ども自身が、「よい行為をするほうが相手も自分も幸せな気分になれる」ことに気づき、進んで好ましい行動をしたと思うようになれば、長続きはしない。言い換えれば、「子どもを変えようとする」のではなく、「子どもが変わることを支援する」という発想に

立たない限り、問題の解決には至らない。

そうした発想で行う具体策のヒントは、先に触れた、かつての子どもをとりまいていた状況の中にある。近隣の遊び（仲間）集団体験が、それである。結論から言うと、「異年齢集団による交流活動」を通しての、年長者の「自己有用感」の獲得と、年少者の「年長者の役割への」あこがれの芽生えにより、子どもは「人とかかわる」ことが好きになる。そして、それにとどまらず、相手のために我慢する・譲るといったことすら、さほど不快には感じなくなり、ときにはそうした行動を誇らしく思うようにする。その結果、相手と同じ学年の場合であっても、「友だちとかわかることが好き」になり、「友だちを大切に思う」ようになる。

この十年ほどの間に筆者がかかわった調査研究の知見や実践研究の経験からいうと、こうした異年齢集団の持つ教育力を利用する方法以外には、普通の小学校で当たり前に実施でき、実際に効果も上げるものは見あたらない。問題を抱えた、あるいは反対にできのよい、そんな一部の子どもが変容する方法なら、他にもあろう。しかし、大多数の子どもの成長を促すことができる方法で、普通の小学校で簡単に実施でき、しかも教育課程を無視

することなく、特別な研修を受けたり、特別な専門家の手を借りたり、特別な施設に出かけたりする必要のない方法となると、他にない。

だが、「異年齢交流で子どもが育つ」ことをいくら強調しても、何か夢のような話、嘘のような話にしか聞こえないかもしれない。なにがしかの異年齢交流を行っている小学校は少なくないが、必ずしも子どもは成長していないのが普通だからである。よくある誤解だが、異年齢で交流させておくと、子どもが「自動的に」育っていくわけではない。「子どもが育つような異年齢交流をいかに実施するか」が大切なのである。

「異年齢交流」実践のポイント

ここで、「子どもが育つ異年齢交流」を実施する際のポイントを示そう。

- ① 最大の目的は、年長の子どもが年少の子どもの「お世話をする」体験を通して、「喜んでもらえてうれしかった」「役に立ててよかった」という「自己有用感」を獲得できることにある（それが達成できれば、人とかかわることが好きになるからである）。

② もう一つの目的は、「年長の子がお世話をしてくる姿」や、「自己有用感を獲得して誇らしげにしている姿」を見て、年少の子どもが年長者の役割に「あこがれ」を抱くことにある（それにより、好ましい姿をモデルにして成長できるからである）。

③ 教職員に求められるのは、これら①、②のことがうまく実現できるような活動の機会や場を考え、実際にうまく進むように支えていくことである（お世話をする年長側は六年生が望ましい。お世話される年少側との年齢差は大きい方がよい。一回きりで終わることなく、数回継続できるように、年間計画を立てる。年長側が主体的に取り組めるような、楽しい活動、無理のない活動、工夫の余地のある活動を選ぶ。どのようなタイミングでどのような声かけをすることが①、②に結びつくのかを、常に意識して子どもや他の教師に働きかける、等である）。

要するに、異年齢交流は目的ではなく、あくまでも手段であることを、正しく理解しておく必要がある。もちろん、その手段がうまく実現できなければ、本来の目的である年長者による自己有用感の獲得も、年少者のあこ

情や自己存在感、自己肯定感、等の語を用いるのが一般的であった。しかし、筆者はあえて自己有用感という語を使用する。それは、「他者から認められた」という点に着目しなければ、問題の本質が見えず、ピント外れの対策にしかないからである。

その一例を示そう。昨年は、「お父さんを困らせたかった」といった程度の理由から無差別殺人にまで至ったという類の事件が続いた。そうした事件の加害者に対するコメントの一つに、「自分に自信がない一方で、プライドだけは強い」といった主旨のものがあつた。もっともらしいコメントのようだが、英語に置き換えてみると、「self-esteem（自尊心）は低い」という意味不明なものになってしま

がれの芽生えも期待はできない。だから、異年齢交流が当面の目標であることは間違いない。だが、それは最終目的ではない。小学校の教師は、最終目的がどこにあつたかを忘れ、当面の目標の達成に邁進する傾向が強い。ユニークな発想やエネルギーが豊富な姿勢には感服するばかりであるが、手段が自己目的化しやすい点には注意が必要である。たとえば、「同じ交流させるなら、さまざまな学年と広く浅く交流させてみたい」などといった話に変わってきたら、要注意である。何が目的だったのかを、常に思い起こしてほしい。

子どもが育つ異年齢交流になるよう、教師は、何を、どこまで、準備しておくのか。そして、子どもに任せた後は、どのように彼らを支え、フォローしていくのか。年間計画等も含めた、より詳細な実践例や、実践を通して得られたさまざまなエピソード、実際の子どもの変容を示した調査結果等は、筆者が編集した『改訂新版 ピア・サポートではじめる学校づくり 小学校編』（金子書房、二〇〇九）をご覧ください。

似て非なるものを混同しない

ところで、こうした話題を論じる際、従来は、自尊心、う。しかし、これを「自尊心等はある（自分の自分に対する評価が高い）が、自己有用感が乏しい（それに見合うような他者からの評価がない）」と表現すれば、問題点が明確になる。幼いころから親に自己実現を期待され、叱られもせずに褒められて育つたことで自尊心は高いのに、学校や社会からはさほど注目もされず、自己有用感に乏しい。そうしたことが事件等の背景にあることを指摘するには、自己有用感という語が最適なのである。

実際、こうしたギャップを抱えた子どものストレスが高いこと、事件を起こさないまでも、いじめ等の加害者になりやすいことを、筆者は十年ほど前の調査で明らか

にしたことがある。今回、紹介した「子ども自身が実際に集団活動に参加し、そのメンバーから認めてもらえたという実感を重ねさせる」方法は、そうした知見を踏まえて開発されたものであり、自己有用感を獲得できる仕組みづくりがその中核となる理由もそこにある。

なお、言うまでもないと思うが、この方法を、数時間ほど取り組めば子ども人間関係づくりができると主張するエクササイズや、社会性を育てられると主張する訓練プログラム等と混同してはならない。そもそも、大人主導で「エクササイズにより自己開示を促す」「スキルを教え込む」という方法は、「友だちと仲よくなりた」とは思っているが、うまくできない「子どもには効果も感じない」子どもには効果を感じない。必要とリングを自分から受けに来たような大人とは、まったく状況が異なる。

さらに、そうしたエクササイズや訓練プログラム等のもう一つの限界は、学級内での実施が想定されている点である。学級(同学年)内の交流にとどまる限り、すべての子どもが変容することは期待できない。なぜなら、同年齢同士だと、つい勝ち負けや損得という判断が入り

込み、素直に譲ったり謝ったりできないのが普通だからである。ところが、相手が明らかかな年少者の場合、決々ではあっても譲ることができる。そこをすかさず大人が褒めると、そこで得た自己有用感に味をしめ、同年齢の相手にも同じことができるようになる。異年齢の教育力を強調する理由である。

まずは、人とかかわることが好きになること。そうすれば、友だちとかかわることも好きになり、友だちを大切に思う心も育つ。「心」だけを取り出して「治療」でもするかのように考えるのは、誤りである。「病んだ大人」と「育つ機会が与えられなかった子ども」を同一視し、誤った対応をしてはならない。